

臨床の地平からみた人間形成
— 矢沢宰の足跡を辿って —

大関 健一，青柳 宏

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第72号 別刷

2022年3月

臨床の地平からみた人間形成

— 矢沢幸の足跡を辿って—

Human formation from the perspective of clinical horizon:
Following the trace of Yazawa Osamu as a young poet

大関 健一[†]・青柳 宏[‡]
OZEKI Kenichi, AOYAGI Hiroshi

概要 (Summary)

私たちは誰しもが、生を受けたその時から、死を迎えるその時まで、それぞれが、それぞれに唯一の「時」を生きる。世界の内で、かけがえのない〈他者〉と出会い、交わりの中で（自らが意識するしなるとは別に）日々変化し続ける。私たちの内では常に、これまでと同じようでありながら、しかし以前とは異なる、何か新たなものが生起し続けている。その唯一性、流動性がゆえ、人が育ち、育まれていく過程は神秘的であり未知に満ちている。

本稿は、詩人 矢沢幸（1944～1966）の日記と詩を、矢沢幸という一人の人間の「人間形成の軌跡」として読み深めていく。道元禅師をはじめとした、先人の思想を手がかりにしながら矢沢幸のゆたかな内面世界に想いを巡らせ、臨床という地平から、改めて人間形成について考えていきたい。

キーワード：人間形成、生と死、時、永遠、信、人間の力を越えたもの、美しさ、愛、他者

1. はじめにかえて

人間形成は、教育という営みの中において、子どもから大人への発達に目が向けられることが多く、そこでは、子どもの成長、発達に向けた大人からのアプローチに焦点が当てられる。視野を広げてみるならば、生涯を通して、学校、家庭、社会など、様々な年代や場において、個人が学びの機会を生かし、自らの成長とゆたかな日々を目指す生涯学習のような文脈の中で語られる。そこで考えられる人間形成は、教育の場、学びの場が設定され、教える者と学ぶ者という関係の中で捉えられる。そうしたとき、そこには教える者の、学ぶ者に対する人間形成上の目的と目標が生じる。もちろん、そのような教育における人間形成、計画性を帯びた営みは重要で欠かすことのできないものである。ただし、本来、人間形成は、そのような枠組みの中だけで生じるものではないだろう。それは人間のあらゆる生の内でききる。自己、他者、世界が、私たちの思惟によって全て理解され、包括され得ないのと同じように、人間形成もまた、その多くは未知の内にあるとは言えないだろうか。そして、敢えて言えば、計画性を帯びた教育の営みの地平に立脚すればするほど、あらゆる生の内できている人間形成について、意識できなくなっていきはしないだろうか。それはまた、人間形成自体をより狭義のものとして、ある種、思惟的に調整可能なものとして捉えることへとつながってしまうようにも

[†] 真岡市立真岡西小学校

[‡] 宇都宮大学大学院教育学研究科 宇都宮大学 共同教育学部 (連絡先: aoaygi@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

思える。

人間形成を、あらゆる状況下で、あらゆる生の内で、常に生じ続けるものとしてみるならば、一般化され語られうる人間形成の過程に対して、現実の人間形成における一つ一つの体験は無限にも近い個別、具体のものと言えるだろう。例えば、強制収容所における自身の体験を綴ったヴィクトール・E・フランクルの著『夜と霧』。第二次世界大戦の最中、身を隠した8人のユダヤ人の生活を記したアンネ・フランクによる『アンネの日記』。それら唯一の体験から、普遍性へと辿る道はあるだろう。しかし、それら唯一の体験は、決して一般化されることはない。哲学者である中村雄二郎は、著書『臨床の知』の中で、近代科学の原理とは異なる〈臨床の知〉の原理として〈固有世界〉〈事物の多義性〉〈身体性をそなえた行為〉を挙げた。

「すなわち、科学の知は、抽象的な普遍性によって、分析的に因果律に従う現実にかかわり、それを操作的に対象化するが、それに対して、臨床の知は、個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り、捉える働きをする、と。」(中村,1992:p.135.)

一般化されることのない固有で、多義的な、身体性をともなった体験の地平。あらゆる生の内で生じている人間形成について考えるときもまた、そのような地平に立ち、唯一の体験に出会い、想いを巡らせ、語ることが必要なのかもしれない。

本稿では「矢沢宰」という一人の詩人の、死と向き合った二十一年という生涯を見つめる。矢沢宰の、唯一の、固有で、多義的な、身体性をともなう生にふれることを通して、そこに生じていた人間形成について考えを巡らせたい。そこから私たちが学び得ることは決して少なくはないだろう。矢沢宰という一人の人間の、死を目の前にした生に寄り添う「臨床」、領域や枠組みを越えて、唯一、固有の矢沢宰自身の生きた姿から人間形成について考える「臨床」、本稿はそのような二重の意味において、臨床の地平から人間形成について考える一つのころみである。

2. 矢沢宰の生涯 一目的は…生きることである一

はじめに矢沢宰の日記を引用する。

十月二十五日

私の目的は何であったか。私の命の真の目的は何であったか。生きることである。満たされたものを求めてやまぬ、幸福を求めてやまぬ力である。その力を得るために21年間生きてきたのであり、それを一人で実行されるように教育されてきたのだ。私の魂は求めてきた。病気で人よりは範囲が狭いかもしれないが、私は一生けんめい求めてきた。自力で、真に独力で、そして神の中に。人類を越えた絶対的な力の中に、無限の宇宙の中に！ そして、人の心の中に、女の愛の中に求めてきた。力ぞえを、はげしさを、すくいを！ 愛を私は求め続けてきた。

残ったのは何だ！ いつも絶望だけだ！ 悲しいのだ。いいしれぬ暗黒の中で。おそろしいのだ。それから、いらいらしてくるのだ。絶望感を、私はどうすればいいのだ。町をやたらむしゃに歩いても、将棋をしても、魚つりのうきに目をこらしても、想いはどうしても彼女のことにかえるのだ。最後の望みを彼女にたくした。それは結果的には見事に裏切られた。そして、それでも私は彼女への望みを捨てきれないのだ。彼女の魂と彼女の身体とを求めてやまないのだ。しかし、それはもう日増しに、かなわないものとなっていくのだ。25日、あと一週間もなくして、彼女はここから去る。惜し

いのだ。体中に熱いものが満ちてくる。許されぬ想いをいだいた男の慟哭は、誰にもわからない。私は吉住先生に恥をしのんで助言を得ようと幾度考えたか。同室の鈴木さんに、そして看護婦の岡崎さんに。しかし、はたして私の心を許せる人で、真に私を理解してくれる人であろうか。否、私は彼らの中にだけでなく、友人、知人、親類の中にも、私は私の真を許しはしないだろう。私は、彼女に対する苦しみを抜けるために、二度と、人の助言は求めぬ。(矢沢,1970:p.103-104.)

上の文章は、詩人 矢沢幸が書いた最後の日記である。二十一歳で亡くなる約四か月半前の一九六五年十月二十五日、この日で矢沢の日記は終わっている。この日記は、矢沢幸《光る砂漠》日記篇『足跡』に収められている。あとがきである「若い読者のために」には、「その日附以後、プツリと切れて（いつそうしたのか、カミソリのようなものできれいに「始末をつけられて」）いる」（矢沢,1970:p.109.）とされていることから、実際には十月二十五日以後も、矢沢自身の日記を通した自己との対話は続いていたことが想像できる。しかし、その内容については、私たち読者の想像にゆだねられている。

残された日記には、十四歳から生涯を終える二十一歳まで綴り続けられた約七年にわたる矢沢幸という人間の生、思想、葛藤が満ちている。そしてそれは、死との対話を重ねながら、自らの生を見つめた矢沢幸という一人の人間の「人間形成の軌跡」と言えるのではないだろうか。

本稿では、この最後の日記の言葉から歩みを始め、矢沢が遺した日記と著書として集成された約百四十篇の詩をたよりにしながら、矢沢幸の矢沢自身による「人間形成の軌跡」を見つめていきたい。

矢沢幸は、一九四四年五月七日、中国江蘇省海洲で生まれた。父が現地応召で南方戦線へと向かったため、一歳で母に連れられ、現在の新潟県見附市へと引き揚げた。小学校入学の後、八歳で腎臓結核を発病。十三歳の三月二十七日に三条結核病院小児科に入院し、その八か月後の十四歳から日記を書き始めた。一九六六年三月十一日、毎日書き続けた日記と、五百篇余の詩を遺し、矢沢幸は二十一歳という短い生涯を終えた。以下、矢沢幸の略年譜を引用する。

一九四四・五・七

中国江蘇省海洲で生まれる。

一九四五・七（一歳）

父が現地召集となり、母と二人で郷里の（現）新潟県見附市河野町へ引き揚げる。

一九五一・四（六歳）

上北谷小学校へ入学。

一九五二・十二（八歳）

雪を赤く染めた血尿で発病に気づき、腎臓結核と診断される。

一九五三・四

新潟大学附属病院で右腎摘出手術を受ける。

一九五八・三(十三歳)

一年遅れての上北谷小学校卒業とともに県立三条結核病院へ入院。以後、ベットでの安静と闘病生活を強いられる。

一九六〇・五(十六歳)

詩集『それでも』を手づくりで編む。

〃 ・七

詩集『詩の散歩』を自装でつくる。詩作活動は、この年と翌六一年にかけて頂点に達した。

一九六一・五

病状の回復とともに、併設の県立三条養護学校に通いはじめる。

一九六三・三(十八歳)

養護学校中学部を特別進級で卒業。退院して五年ぶりに自宅に帰る。

〃 ・四

県立栃尾高校へ進学し、文芸部に入る。

一九六五・三(二十歳)

腎臓結核再発。三条結核病院に再び入院。

一九六六・三・十一(二十一歳)

劇症肝炎を発症。永眠。詩五百篇余を遺した。

(矢沢,2016:p.154-155.)

矢沢は、最後の日記において、命の真の目的は「生きること」だと記した。「満たされたものを求めてやまぬ、幸福を求めてやまぬ力」を得るために生き、「愛を私は求め続けた」と矢沢はいう。「生きること」それ自体が目的であり、「生きること」は幸福を求める力を得ることであり、愛を求めることであった。腎臓結核を発病してから二十一歳で生涯を終えるまで、死はいつも矢沢の目の前にあった。

第一に死が

第一に、そこに死があり、死と戦わなければならなかった。そこには死と自分だけしかなかった。そこから個人的な真実、祈りが生まれ、それが詩となって表わされた。だからそれはリアルな、最もリアルなものである。

自分の命のために、愛を求め、生の真実を探るためにもがいていた。これは絶対に間違いではなかったし、今もこれが十分あてはまると確信している。(矢沢,2016:p.56.)

死と戦い続けた矢沢だからこそ、「生きること」そのものが命の真の目的というに至ったのではないだろうか。もちろん、そのような想いに至るまでの、想像を絶する苦悩の跡も、矢沢自身の言葉で多く綴られている。例えば、詩「それでも」の中には、次のような一節がある。

「俺は夜になると思う／今日一日生きられたと言う／喜びの感謝と／なぜ生きているのだ！／なんのために／なぜ生きたいのだ……と／俺は考える／何がなんだか／わからなくなってくる／俺は心の中でさけぶ／どうすればいいんだ！／……俺はわからない」（矢沢,2016:p.27.）

生きている理由、生きる目的、生きたいという自らの想いに対する自問。自らの死を直視せざるを得ない状況に置かれていたからこそ、沸き起こる身を切るような切実な問い。そんな壮絶な自問自答は、矢沢幸という一人の人間の人間形成に大きな影響を与えたことは間違いないだろう。また、まさに矢沢の置かれたその状況こそ、矢沢自身の人間形成の「場」であったと言えるだろう。

「成功と幸福とを、不成功と不幸とを同一視するようになって以来、人間は真の幸福が何であるかを理解し得なくなった。」（三木,2011:p.84.）

三木清は著書『人生論ノート』において、そう記した。幸福は存在に関わり、成功は過程に関わると。（矢沢自身も『人生論ノート』を読んでいたことが、十九歳の時の日記に記されている。）三木の思想をもとにするなら、成功というものは、何か目的地を目指し、そこへ向けて歩みを進め、辿り着く過程に関わっている。近代以降広がりを見せた、進歩という観念や啓蒙主義、そこから現代に至る進歩的、合理的なもの見方は、飛躍的な科学の発展と経済の成長に寄与した一方、幸福と成功の同一視をまねくこととなったとは言えないだろうか。幸福を成功と同一のものとしてしまったとき、本来の幸福と同様、存在に関わるはずの「生きること」は、それ自体が目的ではなく、成功（同一視された幸福）を目指すための手段となる。「生きること」が手段化されたとき、私たちはもともと「生きること」の内に満ちていた生それ自体の奇跡や美しさ、「生きる意味」を見失うと同時に、その意味を改めて求め始めるのではないだろうか。三木が記したように、現代社会においては、幸福を成功と同一視し、そこへ辿り着くことを目指す側面が強いように思われる。それは学校教育においても、少なからず言えることではないだろうか。到達すべき成功を設定し、そこに向かい学習に取り組むよう指導を受ける。そこでは、存在よりも過程が重視され、求められる成功は、一般的なものであり、量的に測られる。その在り様は、どこか

「幸福は各人のもの、人格的な、性質的なものであるが、成功は一般的なもの、量的に考えられ得るものである。」（三木,2011:p.84-85.）

という、三木の言葉と重なる。

それは、決して矢沢も例外ではなかった。幸福と成功との間で、苦しんでいた十五歳の四月二十三日（金）の日記を引用する。

「俺はやっぱり、この世の幸福を求めている！口では求めていないと言っても、どこかで、この世の幸を願っている……という言い方が悪かったら、俺は、今でも、この世の幸せ、快樂をおしんでいる。すぐに俺の頭の中に金や名誉や女の事が浮び上がってくる。いつまでたってもダメではないか。」

（矢沢,1970:p.14.）

矢沢は、学校に通うこともできない日々、時に身動きもとれないような病状、この日記の後に続く

六年という歳月の中で、まさに「生きること」それ自体を目的とし、生きるに至った。そして、繰り返しになるが、そんな矢沢の人間形成に最も大きな影響を与えたのは、若干八歳にして突きつけられた病であり、死であった。

病院のベッドの上、寝たきりの日々、一時的な回復と病気の再発、死の影はいつも矢沢とともにあった。過去から現在、未来へと流れる時間という概念から見たとき、目の前に迫る死は、人が求める成功とその過程を絶ち切る。死による「時間的な成功への過程」の切断は、矢沢の内に苦悩を、葛藤を、時に絶望感をもたらした。しかしまた、それと同時に、時間的な過程の切断は、矢沢に異なる「時」の感覚をもたらし、(矢沢の言葉を借りるなら)「自力で、真に独力で」という自分自身や詩との対話、「そして神の中に」という宗教性に関わる対話、「人類を越えた絶対的な力の中に、無限の宇宙の中に！」という自然や宇宙、人間の力を越えたものとの対話、「人の心の中に、女の愛の中に」という愛を見つめた他者との対話へと、その思想を展開していく機縁ともなった。

本稿では、次章以降、複数の先人の思想を手がかりとしながら矢沢の言葉にふれていきたい。

まず「3. 永遠の「時」」において、道元禅師や大橋良介の思想を取り上げ、矢沢の「死と向き合った時間」と「詩が生まれるということ」について考える。

「4. 「信」の希求」においては、引き続き道元と大橋をたよりにしながらも、哲学者M. メルロ＝ポンティの思想をもとに、矢沢の信仰に対するまなざしについて想いを巡らせる。

そして最後の「5. 美しさと愛」では、心理学者C.G.ユングの思想を拠り所として、矢沢が求め続けた「美しさ」と「愛」について、それぞれ思索を深めていきたい。

矢沢の言葉に出会い、一つ一つについて考えていく前に、はじめに取り上げた十月二十五日の日記の後半部分にふれておきたい。「残ったのは何だ！ いつも絶望だけだ！ 悲しいのだ。いいしれぬ暗黒の中で。おそろしいのだ。それから、いらいらしてくるのだ。絶望感を、私はどうすればいいのだ。…」と、矢沢は最後の日記においても、苦しみ悩んでいる。その後の日記が、カミソリのようなもので始末されていることから、その苦悩はそれ以降も続いたものと想像できる。ここでふれておきたいのは、各章において、矢沢の言葉をそれぞれの視点から見つめ記すが、あくまでそれは、ある視点から見つめることで表れる一つの相であるということ。誰もがそうであるように、矢沢自身もゆるゆるの想いの中で迷いと矛盾を抱きながら葛藤し続けた。本稿は、いくつかの視点から想いを巡らせ、そこに見えてきた相を一つずつ提示していく形をとった。

以下、矢沢の蔵書(矢沢,1991:p.113.)でもあった岸本英夫の『死を見つめる心』から引用する。

「生死観を語る場合には、二つの立場がある。第一の立場は生死観を語るにあたって、自分自身にとっての問題はしばらく別として、人間一般の死の問題について考えようとする立場である。これは、いわば、一般的かつ観念的な生死観である。(中略)しかし、もっと切実な緊迫したもう一つの立場がある。それは、自分自身の心が、生命飢餓状態におかれている場合の生死観である。腹の底から突きあげてくるような生命に対する執着や、心臓をまで凍らせてしまうかと思われる死の脅威におびやかされて、いてもたってもいられない状態におかれた場合の生死観である。ギリギリの死の巖頭にたつて、必死でつかもうとする自分の生死観である。」(岸本,1973:p.11-12.)

これは、岸本が長きに渡る癌との闘病生活の中で記した言葉であり、その言葉を支えるのは生命飢餓状態に身をおいた岸本自身の第二の生死観である。それは、第一の観念的な立場とは異なり、質的にも全く異なる生死観といえる。矢沢宰の言葉一つ一つも、まさに矢沢の生命飢餓状態におかれた第二の生死観から生じている。それが矢沢唯一のものである以上、それを読む私たちの生死観が第一の

観念的な立場を脱し、本当の意味で矢沢の生死観に近づくことは難しい。ただ、それでも、それを自覚した上で、遺された矢沢の言葉に寄り添い、矢沢幸という一人の人間の生命に想いを巡らせていきたい¹。

3. 永遠の「時」—自力で、真に独力で—

3. 1. 「死」という川

四月二十一日(木) 晴～曇

…とにかく、ぼくの前には動かすことのできないものがあるのだ。例えば、ぼくの場合は目かくしをせずに川の前に立っているようなものだ。ところが、死を意識しない人達は、目かくしをして、未来の夢を見ているようなものだ。(中略)／夢を持つ、すると、「この現実でその夢が何になる、もうすぐ死ぬのではないか、永くはないのだ」という。「じゃ、ぼくは何をすればいいのだ！ 行動もダメ、夢もダメ、精神の安定性もなし、詩もダメ、恋もダメ、何がじゃぼくを勇気づけ、ぼく自身が自信を持ち、安心するというか、道を走ることができるのだ！」／死を考えることによって、生を有意義なものとする。これはこれから大いに考えるべきだ。(矢沢,1970:p.49-50.)

十七歳の誕生日を約二週間後にひかえた矢沢の日記。前半の矢沢の内面世界を表したメタファーは、死と自らの関係についての切実な想いを表している。矢沢の目の前には「死」という川がある。今この時と死の時までの時間は、その内面世界において「ぼく」と「川」までの空間的な距離に置き換わる。矢沢の「死」との戦いは、目の前の「死」までの限りある時間、失われていく時間との戦いでもあった。矢沢は葛藤の中においても、日記にあるように「死を考えることによって、生を有意義なものとする」という想いを抱いている。それは、哲学者であるM.ハイデガー(1889～1976)の「死への先駆」、死を意識することによって、自らの生を見つめ直すという思想ともつながるものであるように思える。ただしかし、矢沢の見つめた死があまりに目の前であったこと、加えて、矢沢の想いが、自己の生や、その可能性だけでなく、より広がりを見せていったことなどからも、「死への先駆」という捉えでは包摂できないものがあると言えるだろう。その限りなく「死」と隣接した時間と、その内における葛藤が、矢沢自身の「時」に対する感覚、そして詩を育てていった。

そんな矢沢の「時」と、そこから生まれた詩について考えていくために、本章では、大橋良介の著書『時はいつ美となるか』と、大橋が論の根底に位置付けた道元の「時」の思想を手がかりとしたい。大橋は、道元の『正法眼蔵』における時間論と現象学の地平から「時とは何であるか、また時と共に熟しゆく生と美とは何であるか」について問い、論じている。

まずは、大橋が論の拠り所とした道元の「時」の思想についてふれたい²。

3. 2. 『正法眼蔵』における「時」

大橋の『時はいつ美となるか』は、中世から近代にかけてのヨーロッパにおける絵画や彫刻、建築を取り上げ、時が熟すという「時熟」について論じたものであるが、矢沢幸の「時」とそこから生まれた詩、矢沢の生を考えるにあたり、大きな示唆を与えてくれると思われる。矢沢の「時」について考えるために、まず道元の「時」の概念と、大橋の論じている「時熟」の概念についてみていきたい。

道元(1200～1253)は、鎌倉時代を生きた禅僧で、日本における曹洞宗の開祖である。道元は『正法眼蔵』の中で次のように記した。

「いはゆる^う時^じは、時^じすでにこれ^う有^うなり、有^うはみな時^じなり。」(禪文化学院,2002:p.26.)

道元は、本来「時」は有(存在)であり、有(存在)はみな時であると言う。ここでは、「時」が、過去から現在、未来へと自己の外を流れるというような捉えは否定され、有(存在)と「時」は一体であるとされる。あわせて、大橋の「有時」についての解釈を引用する。

「時の内に有るものは、それ自身が時間的な性格を持つ。時計で測られる「時間」が「時そのもの」の抽象態にすぎないことは、昔から気づかれていた。それぞれの時が熟したもののみが、それぞれの有となる。逆に、有るといえるものはみな自らの時を持つ。(中略) そうだとすると、美も、「時」が美として熟す出来事だと考えられる。それは、「秋」が柿の実において熟すということと通ずる。」

(大橋,1984:p.11.)

大橋は、道元の「時」の思想をたよりに「時が美となる」ということは、時が美として熟すということであるとす。また、加えてそのような美的時熟は、「時」の一つの卓越した在り方であると語っている。

以上のような「時」の思想をたよりに、矢沢宰の内面について想いを巡らせていくなれば、そこにどのような世界が見えてくるだろう。次に、具体的な矢沢の詩を取り上げ、矢沢の「時」の感覚について考えてみたい。

3. 3. 「永遠」にひたるということ

まず、矢沢の作品の中で、「時」についての感覚が感じられる詩「五月が去るとて」を引用する。

五月が去るとて

五月が去るとて
何を悲しむ。

たとえ伏す身といえど
熱き血潮をたぎらせて
生きると決したは
この五月の時では
なかったのか。

五月が去るとて
何を悲しむ。
この胸に
真白きバラを
押しつけて
進もうと誓いしは
この五月の時では
なかったのか。

五月が去るとて
何を悲しむ。

ああ だがこの若き十六歳を
むかえての
五月が再びまいらぬと思えば
我胸は涙でむせぶ。(矢沢,2016:p.28-30.)

五月は、矢沢の誕生月である。死を目の前にした矢沢にとって、五月は自らの生を象徴する「時」でもあった。毎年五月七日の日記には、感謝と決意が綴られている。生きることへの決心や誓いについては、詩「五月が去るとて」からも読み取ることができる。ただ一方で、矢沢は「五月が去る」ということ、「五月が再びまいらぬ」ということに、強い悲しみを感じていたことが分かる。十八歳の十二月には「ときが消える」という表現で「時」が減ること、無になることについてふれている。「ああ最後の月になった。今年もまた消えて行くときが近づいてきたのだ。ときが消える。それはどういうことなんだ。死ねば、もう無いと同じようにすべてが無になる。結果や未来が残るとしても、その時が再び帰らないのだ。／ということ、死ぬことがいやと同じくらいの気持ちで、時をおしみ、大事に……。」(矢沢,1991:p.70.) 矢沢は「時」が消えるという感覚をもっている。死ぬことがいやと同じくらいの気持ちで、時をおしむ矢沢にとって、「時」はまるで生そのもののようでもある。

次に、「時」の感覚と詩への想いが交わりをみせる作品を取り上げる。

詩よお前は

詩よ

お前はやがて消えてゆく足跡
紙の上から消えてゆくぼくの足跡

詩よ

消えてゆく悲しみを嘆かないでくれ
お前はぼくの中でいきているのだ
ぼくの中にあるかぎり消えはしないのだ
ぼくが命を受けたその時から
お前はぼくといっしょなのだ
そして足跡の消える悲しみよりも
消えることのない永遠の苦しみを
ぼくといっしょに背負っているのだ

詩よ

永遠の中にひたろうではないか
悲しみも苦しみもお前もぼくも
みんなでひたろうではないか (矢沢,2016:p.47-48.)

矢沢は詩に語りかける。大橋の時熟の視点を手がかりとするなら、詩は自らの「時」を持つ。「時」は熟し、時は詩として有(存在)となる。「詩よお前は」は、時が詩として時熟し「永遠」として表れることを直感的に綴っているように思われる。そして、詩は紙の上に綴られることによって、消えゆく日常的な時間の中にさらされる。詩はやがて消えゆく。それは紙の上から消えてゆく足跡。ここでも矢沢は、上に挙げた日記と同じように、詩が「消えていく」という感覚をもっている。それは、綴られた詩が、誰にも読まれることなく、他者によって反復されることなく終わることを意味するのだろう。詩は、自己(矢沢)の外を流れる時間の内で消えていく。大橋は、現代の時間は速いとし、そのような時間を「加速度的時間」と表現した。

「加速度的時間は自己というものを見失わせしめ、人を混迷に陥れる。それは「美」として時熟しないというのみならず、そもそも何かの時熟というものを根こそぎにする。それは、信仰の人をも無信仰の人をも等しく脅かす。加速度の支配するところでは救済が求められる。」(大橋,1984:p.60.)

加速度的時間の中において、矢沢は死による自己の消失と、詩の消失を見つめていた。「3. 1.」でもふれたように、「死」が川のように目の前にあり、その川との距離が縮まっていくかのような時間は、矢沢を苦しめた。しかし、「詩よお前は」において、時が詩として熟するとき、その加速度的時間は破られる。「お前はぼくの中でいきているのだ／ぼくの中にあるかぎり消えはしないのだ」と語りかける矢沢は、詩と共に、日常の加速度的時間を破った次元に立とうとする。矢沢は詩に語りかけるが、一方で詩自体が異なる地平へと歩み出す矢沢を支えていたようにも思える。詩の後半、「永遠の苦しみ」を一緒に背負い「永遠の中にひたろう」と、矢沢の目は「永遠」を見つめていた。

「「永遠が欲しい」というのは、悪いことだろうか？ 永遠なんてものを真剣に考えるのはバカらしいことなんだろうか。」(矢沢,1970:p.30.)

十六歳で「永遠」について真剣に考えた矢沢。それは時間と向き合う矢沢にとって切実な問いであったのだろう。

「永遠」とは、私たちの外を流れる無限の時間を意味するのではない。また、「4.」において後述するが) 矢沢が神の存在や宗教上の信仰に迷いをもっていたことを考えると、死後の世界や輪廻転生のような信仰上の無限の時間とも異なるだろう。矢沢幸の内に見られる「永遠」について、ここからは道元の「時」の思想をたよりに、その様相をイメージしてみたい。

道元は、「有時」巻の中で次のように言及している。

「時時の時に尽有尽界あるなり。しばらく、いまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし。」(禅文化学院,2002:p.29.)

道元は坐禅を通した心身脱落を説いた。「脱落」とは「空」の体験といえる。すべての存在の無差別、無分節というような存在以前にふれること、日常という表層的次元において感じられている存在が「空」に還元されることをさす。そして、その「空」という深層的次元から再び世界が立ち現れることを「現成」とした。本来は無差別、無分節な「空」の内から、存在が「時」として現成する。上に引用した「尽有尽界」とは、そんな深層的次元から見たすべての存在、すべての世界の姿であり、そこから改めて現成してきた「時」である存在、世界の在り様を表している。

それらを踏まえた上で、ここで着目したいのは「いまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし」である。道元は「いまの時」でない「時」はないとした。全存在、全世界は「いまの時」であると。「いまの時」とは、深層的次元である「空」という無時間から世界が現成される、その「瞬間」である。

この「いまの時」は、私たちの外を流れる加速度的な時間ではない。無時間の内に立脚する「時」、それは「永遠」の「時」といえる。

矢沢が道元のような「有時」や「空」の思想を表現しているということではない。また、矢沢の日記や詩、蔵書を読む限り、矢沢にそのような思想があったわけでもない。死に直面して、「去る」時、「再びまいらぬ」時を思い、苦悩し続ける矢沢は、加速度的時間とは異なる永遠を見つめた。道元の「時」の思想は、その矢沢の深層的次元をイメージする手がかりとなるのではないかと考える。

「ぼくの中」という消えることのない次元において、消えることのない永遠の苦しみをいっしょに背負う。そこは「時」が詩として時熟し、紙の上に現成する以前の次元であり、まさに詩が現成しようとする無時間の内の「いまの時」である。「永遠の中にひたろうではないか／悲しみも苦しきもお前もぼくも／みんなでひたろうではないか」矢沢は、悲しみも苦しきも詩も自己も、永遠の中にひたることを求める。それは矢沢にとってどんな意味をもつのだろう。

大橋は「加速度の支配するところでは救済が求められる」と記し、「美は人生を救済するか」という問いを立てた。そして自ら次のようにその問いに答えている。

「…美はおそらく救済するものではない。それはむしろ、救済を必要としないものの相である、と。美的時熟の反復とは一面で加速度的時間からの脱出ではあるが、その脱出は単なる逃避ではない。それは、ひょっとして救済を必要とせぬものに触れることではないのか。」(大橋,1984:p.62.)

矢沢にとって、詩は救済の力たり得たのだろうか。大橋の言葉を借りるなら、矢沢にとって詩が生まれるということは「救済を必要としないものの相」であり「救済を必要とせぬものにふれること」だったのかもしれない。矢沢は詩とともに、無限の時間とも、生死を越えた信仰的な時間とも異なる、救済を必要としない永遠の「時」の内にひたる。

「時」が熟し、加速度的時間の破れから詩が生まれ出てくること。矢沢は深層的次元から詩が現成することを直感的に捉えていたように思える。

以下、詩と、詩が生まれてくる相を感じさせる言葉をいくつか引用する。

「詩を書くから 詩を書くから悩むのか／悩むから詩を書くのか／そうだ俺は悩むから／詩がうまれるのだ」(矢沢,2016:p.32.)

「詩の散歩 コロコロと／桃色の玉や／紫の玉や／緑の玉やを／上手に使いわけ／詩が朝の散歩に／行きました」(矢沢,2016:p.33-34.)

「詩に 私がただじっと／貴方が出てくるのを待っているのに／貴方は素直に出てきてくれない／私の考えが間違っていたのかもしれない／でもそうだったら優しくおしえてくれればいいのに……。／そしたら どんどんつき進んで／涙も流そう！／喜びの声もあげよう！／素直にでてきて／私と手をとって合ってくれ／私はこうやってペンと紙を用意していつでも待っている。(11月24日)」
(矢沢,1970:p.31.)

「十月二十一日(土) 曇／詩ができた。池の水の、おくのおくの水を、ひき出し、あたためなければならん……。そう思ったら、詩ができた。」(矢沢,1970:p.66.)

「六月十九日(土) 曇／私の中の詩が言葉にならない。」(矢沢,1970:p.100.)

十四歳の十月から詩を書き始めた矢沢。上に挙げたのは、その多くが十六歳のときの言葉である。戦後の二十年を生きた十代という若さの少年の内に、これほどまでにゆたかな世界が広がっていったことに感嘆せざるを得ない。しかし、一方で、それは十六歳という年齢だったからこそ、生まれ広がっていった世界だったのではないかとも思える。少年の内にあるゆたかな感性が、死との対話、詩との対話、「時」との対話によって育まれ、そしてそのゆたかな感性が、さらに矢沢自身を育てていったのではないだろうか。

次に、矢沢の詩が生まれる土壌ともいえる、矢沢自身の内面世界について見ていきたい。

4. 「信」の希求 一神の中に、人類を越えた絶対的な力の中に、無限の宇宙の中に！一

4. 1. 信仰上の葛藤

矢沢は十四歳の十二月に病院を訪ねたイギリス宣教師によって、イエス・キリストを知った。そしてそれ以降、キリスト教、神を信じた。正確には、信じようとしていたと言った方がよいのかもしれない。矢沢は、信仰の面においても葛藤し続けた。十五歳の十一月「だが、一生懸命、信じよう、信じようと思って、一心に祈って、神の救いを求めていれば、いいのかもしれない。(中略)最後まで、求めて、救いを求めるのだ。」(矢沢,1970:p.13.)と日記に綴った一方で、その一か月後には、「…私は、主イエスをはっきり信じる事はできない。だが、私は、きっと信じよう。私ができる事は何もない。でも、祈ることができる。」(矢沢,1970:p.13.)と綴る。祈りたい、信じたいという想いと、信じる事ができないという迷いが、繰り返し表現されている。その迷いは詩の中にも表れているように思える。

僕から

僕から

イエス様を

とり去れば

僕は灰になる

僕から

詩を

とり去れば

僕は灰になる (矢沢,2016:p.22.)

「僕から」は、矢沢の信仰や詩についての率直な想いが綴られた詩であるが、同時にそこには、矢沢自身のもつ迷いが表れているように思える。前半の「僕から／イエス様を／とり去れば／僕は灰になる」は、自らの信仰について表現したものだが、そこには若干の違和感が残る。それは、上に書いた信仰上の問題とつながるものである。本来、信仰とはとり去ることができるものなのだろうか。「とり去る」という言葉が表れること自体が、どこか、信じることの難しさを物語っているように思える。また、あわせて後半の「僕から／詩を／とり去れば／僕は灰になる」にも違和感を抱く。前章でみた

ように、矢沢の内で「時」が熟し、加速度的時間の破れから詩が生まれ出てくる。そしてそれが、詩とともに救済を必要としない永遠の「時」の内にひたることであるならば、「詩をとり去る」という感覚自体が生まれてくるだろうか。詩「僕から」からは、信仰と同じように、まだ詩について迷いをもっていた頃の矢沢の感覚を感じ取ることができる。

そんな葛藤を内に抱えていた矢沢は、十六歳の十一月頃から、主治医であった吉住先生と宗教や宇宙などについて問答を繰り返すようになる。

矢沢は吉住先生との対話、キリスト教という宗教との対話の中で、問いをもち、悩み、葛藤し続けた。十代の少年が、そこまで切実に自らの信仰や神について問い続けたのも、目の前の死と向き合っていたためであることは間違いないだろう。そして、その思索を深める一助となったのは、吉住先生による無神論的な主張や（矢沢を想うがゆえであろう）矢沢の考えに対する率直な反論であると言ってよいだろう。矢沢は、吉住先生の信仰についての否定的な話を受けて「そういう意見、考え方もあり、何だか正しくもあるようだな、と思った時、腹の片側をがっばりとえぐられたような気がした。」（矢沢,1970:p.45.）と日記に綴っている。

また、矢沢の看護にあたり、詩を書くきっかけを与えた当時の看護師、立川さんをはじめ、出会った人々の支えが矢沢の思索を支えたと言える。その頃の日記には、キリスト教の信仰、神についての問いと入り混じるように、矢沢独自の感覚、思想の芽生えをみることができる。

矢沢は自らの心が信じるものを求めた。「だから僕は、もっと自由にとというか、自分から神を発見するものでありたいのだ。」（矢沢,1970:p.45.）それは、ある宗教に対する信仰というよりも、矢沢自身の生を支える「信」ともいえる。

4. 2. 矢沢における「信」へのまなざし

4. 2. 1. 「自然や人間の力を越えたもの」へのまなざし

宗教と信仰に迷いをもち続けた矢沢。その「信」を求めるまなざしは、地球、宇宙というような森羅万象へと向かっていく。関連する日記を引用する。

まず、十六歳の大晦日の日記。

「…小さい世界に閉じこもってはいは困る。人生というものは世界というものは、細かく、大きく、底の無いものだ。この地球という大きなかたまりは……。だから小さい所にまで注意するのはいいが、小さいものばかりを見て、自分だけを考えてはいけない。…」（矢沢,1970:p.35.）

次に、十六歳の二月、キリスト教の信仰に悩んでいた時期の日記の一部。

「人生、世界、地球、宇宙、自然の中には、計り知れない何かがあるような気がする。」

（矢沢,1970:p.39.）

十八歳の三月、五年間の闘病生活の末、退院し、家に帰ったときには、次のように綴っている。

「医学の力はもちろんある。人々の深い愛と世話もある。私自身の力も多少はあるかもしれない。しかし、それよりも、もっと大きな全てを超越した大きな力が、私に赤い花を見る今の生きた目を、あたえてくれたのではないだろうか。そういう力のあることを、私は確信している。そして、これからの人生を、おくっていく。」（矢沢,1970:p.73-74.）

「もっと大きな全てを超越した大きな力が、私に赤い花を見る今の生きた目を、あたえてくれたの

ではないだろうか。そういう力のあることを、私は確信している。」と、矢沢は自らをも含めた森羅万象へとその意識を向けていく。全てを超越した大きな力に対する確信は、自然へのまなざしとして詩の内に表れている。矢沢の詩には、空や植物、季節、自然の「時」にふれるものが多く見られ、それらの言葉は平易でありながら、自然のもつ生の輝きに満ちている。矢沢自身の自然に対するゆたかな感受性が詩を生み出し、また同時に、その表現、詩、自然との対話が、矢沢の感受性を育てていったように思われる。例えば、自然との対話を感じ取れる詩として「秋」がある。

秋

秋は透明な
 薄いむらさきだ
 むらさきの秋は
 騒がしいものを寄せつけない
 体の透きとおる人をだけ
 そうっと淋しくなでるのだ
 むらさきの中では
 淋しがりやだが
 強い死なない人だけが
 首をたれて
 落葉をハラハラと浴びるのだ (矢沢,2016:p.38-39.)

矢沢は自らの身体を自然の「時」の内にひたすように、自然と対話する。「秋は透明な／薄いむらさきだ」それは視覚による知覚ではない。「秋」という「時」を、自己と無分節に感じ取っているかのような表現。フランスの哲学者であるM.メルロ＝ポンティは、著書『知覚の現象学』の中で、感覚について次のように記している。

「感覚の主体は、或る性質を書きとめる思惟者でもなければ、それによって影響されまたは変化させられるといった無生気な場でもなく、或る種の生存の場に、その場と共に生れつき (co-naître)、あるいはこの場と共時化されている (se synchroniser) ところの、或る能力なのである。(中略)つまり、感覚は文字どおりコミュニオン〔聖体拝領＝共生〕にほかならない。」

(メルロ＝ポンティ, 訳,1974:p.15.)

メルロ＝ポンティの考えからすると、「むらさき」という色彩は視覚のみによって知覚されているものではない。その知覚は、身体がその色を生きることである。例えば、「むらさき」は、神秘、高貴、感性などに関する雰囲気をもつ。身体的な回復を促したり、不安を癒し穏やかな気分を与えたりというように、それらは視覚という分離された感官の経験ではなく、身体全体の共生現象としての経験である。矢沢の詩は、まさに自然と共生するかのような言葉で綴られる。詩「秋」に限らず、矢沢にとって秋の色は「むらさき」である。そして、その色は透明で薄い。秋は、秋自体と共生するような「体の透きとおる人」だけを「そうっと淋しくなでる」。それはまるで、秋という人間の力を越える自然の神秘が、矢沢の精神を、身体を慰め癒すかのようなものである。ただ、同時に淋しさが漂うのは、「むらさき」がその色の内に秘めた孤独のためか、秋と共生する矢沢自身の孤独のためか、それらが共振するかの

ようでもある。

メルロ＝ポンティは、分離された感覚的性質は反省的・抽象的次元においてあらわれるものであって、それら諸感官の分割に先立って、感覚することの〈原初的層〉があるという。そして、分割に先立つ共感覚的知覚が本来のものであって、私たちがそれに気づかないのは、科学的知識が具体的な経験にとってかわっているからだとする。

矢沢の詩「秋」は、そのような共感覚的な〈原初的層〉において綴られているように思われる。八歳で右の腎臓を摘出し、十三歳で左の腎臓も病に侵され、身体を動かすこともできない絶対安静の闘病生活の中で、このような詩が生まれることに驚く一方で、苦しい身体的制限の中においても生きることを求め続けたからこそ、矢沢はその地平に立つに至ったようにも思える。もう一つ、秋に関わる詩を引用する。

再会

誰もいない

校庭をめぐって

松の下にきたら

秋がひっそりと立っていた

私は黙って手をのばし

秋も黙って手をのばし

まばたきもせずに見つめ合った (矢沢,2016:p.51-52.)

詩「再会」においても、秋はどこか淋しさと孤独を抱いて、ひっそりと立っている。「再会」では、矢沢自身がより一層、自然の「時」の内へと入っていくような印象を受ける。沈黙の内で互いに手をのばす矢沢と秋。矢沢は秋を見つめる。それと同時に矢沢は秋から見つめられている。矢沢が秋を現象として知覚すると同時に、矢沢は秋によって世界の内でその存在を支えられる。秋を見つめるという感覚に、そのゆたかさを感じるとともに、秋によって見つめられているという感覚にも驚かされる。矢沢は、秋を思惟の中で認識するのではなく、自らを秋にゆだねる。秋という神秘の内へ、人間の力を越えたものの内へひたるかのように。

ここで、もう一度、大橋の『時はいつ美となるか』から引用したい。

「美的時熟の条件とは、緩やかなる時である。」(大橋,1984:p.50.) 「「緩やか」ということは、遅いということではない。また、長いということでもない。(中略) 緩やかな時とは、春に梅花を開かしめ、秋に紅葉を染めるような、自然なる速さの時である。自然の時は緩やかである。」(大橋,1984:p.51.)

まさに、「自然や人間の力を越えたもの」へとまなざしを向けることは、矢沢にとって自然の「緩やかな時」の内に自らをゆだね、自らの「時」を熟成させながら生きることでもあったように思える³。

4. 2. 2. 「内なる真実」へのまなざし 一時の与奪一

矢沢は、前述した「自然や人間の力を越えたもの」という自らの外界へ向かうまなざしとともに、自らの内へも強いまなざしを向けていった。十六歳の二月の日記には、次のような言葉がある。

「アンネの日記」にこんなようなことが書かれていた。`自然、日光、自由、自分自身等の中に、

何か常に美しいものが残っていると、気がつくでしょう……。こういうものを眺めてごらん下さい。あなたはきっとあなた自身と神様を発見します、と。これなどは、いい例だと思う。僕はこんなふうになりたいのだ。これが、僕の注文だ。自分から神を発見する。束縛されて、不自由な立場で神を信じようとするのではなく、自分から神を発見する。」(矢沢,1970:p.40-41.)

さらに、十七歳の誕生日の日記では、「自分の本当の心」という言葉で、自らの内なる真実を表現している。

「苦労したっていい、死があってもいい、悩みごとがあってもいいだろう。しかし、自分の本当の心に反しない、純な、素直な心、気持を、行ないをしたいものだ。」(矢沢,1970:p.54.)

また、次のように詩としても表現されている。

武器

ぼくは天才少年ではないから
 ぼくの持っているものだけを
 ぼくにあうように
 つまみだせばいいのさ

するとそこに小さな真実が生まれる
 その小さな真実を
 恥かしがることはないのだよ
 その小さな真実を
 どっこいしょ！ と背負って
 旅をすればいいのさ (矢沢,2016:p.43-44.)

繰り返しになるが、当初、キリスト教の信仰によって、自らの救済を求めている矢沢だったが、「信じよう信じようとしているから、そこにはどうしても自然さというものがない。そしてどうしても義務的になって来る。」(矢沢,1970:p.40.) というように、信仰に対する違和感を抱き、束縛を感じ始めた。そこから、矢沢は自らの内に目を向けた。「こうあるべき」というような信仰ではなく、自ら「信」じるもの、自分にとっての「信」なるものを、自らの内から取り出そうという想いに満ちていった。

詩「武器」では、「ぼく」の内から「ぼくの持っているものだけを／ぼくにあうように」つまみ出すことで、そこに「小さな真実」が生まれるとする。矢沢の内省の眼は、宗教的な永遠の神性を自らの内に見ようとするものではなく、自らの生の肯定という側面があったように思える。「持っているものだけ」「あうように」「小さな」「恥かしがることはない」「旅をすればいい」それらの矢沢の言葉からは、死を抱えた生の有限性をも受け止めたい、自らの内に光を射し、生まれる真実とともに、力強く生きたいという想いが感じられる。

また、腎臓結核にともなう血尿や痛みなど、身体的にも死との対話を繰り返していた矢沢の内省の眼は、外へと向かうまなざしと同様に身体性をともなう。「武器」における、「どっこいしょ！ と背負って」は、内なる想いが直感的に身体性を帯びて表れているといえるだろう。また、詩「私はいつも思う」

では、矢沢の求める内なる美しさと力が「小便」という矢沢自身を苦しめた腎臓や血尿という身体、生理現象と結びつく。

私はいつも思う

私はいつも思う。

石油のように

清^すんで美しい小便がしたい と。

しかも火をつければ

燃えるような力を持った

小便がしたい と。(矢沢,2016:p.77.)

矢沢の内省の眼は、「僕は、僕自身に、真実に務めれ！」(矢沢,1970:p.40-41.)と、矢沢の内に真実の希求という光を射す。それはまさに「2.」で記した、「生きる」という「矢沢の命の真の目的、満たされたもの、幸福を求める力」を照らす光といえるだろう。その光が、より象徴的に表現されたものとして、二十歳のときに綴られた詩「少年」がある。「少年」において、矢沢の内省の眼は、さらに深く、自らの内面へと向けられていく。

少年

光る砂漠

影をだいて

少年は魚をつる

青い目

ふるえる指先

少年は早く

魚をつりたい (矢沢,2016:p.57.)

光は砂漠のすべてを照らす。光は真実の希求、生命の輝き、あるいは人間の力を越えたものの象徴かもしれない。ただしかし、全てを照らし出す光は、同時に少年(矢沢自身と思われる)の抱く影を際立たせる。「時の内なるものは、この光に照らされることによって影を持つ。それは有限であり、消滅の運命を免れない。それは常に「無」と対峙している。」(大橋,1984:p.147.)抱かれている影は「死」の象徴だといえるだろう。光を遮ることも、影を隠すこともできない砂漠において、それは一層強く現われる。釣ろうとしている魚は少年が心の底から求めるものであり、ふるえる指先が、その想いの強さ、光と影の切迫した緊張関係を伝えている。

「有限な人間の内に射しこむ光というのも、言ってみれば夜行性動物にとっての薄闇と本質的には変わらない。そこでは、光が射すということは決して絶対の明るさとはならない。そこには必ず影ができる。時は自らに一つの時を与えるとともに、自らの一つの時を奪う。」(大橋,1984:p.138.)

「時は自らに一つの時を与えるとともに、自らの一つの時を奪う」とはどういうことか。それは、時は物を育てるとともに、物を滅ぼすということ。例えば、柿の実は時を持ち、その時は柿の実に生を与えるとともに、柿の実の生を奪っていく。柿の実の外を流れる時間からは捉えることのできない、その内なる時の与奪によって柿は熟していく。大橋は、「それは本質的には、時の底を破る底なしの無とも言うべきものの影である。(中略)無は、時の内なる死すべき存在者にとっては、「死」という形で迫ってくる。」(大橋,1984:p.162.)という。

そうした眼から、矢沢の内省の光を見るならば、その光は矢沢の「信」じるものを照らし出すと同時に、「死」というその影をより鮮明に現成させていたのかもしれない。内省の光が一つの「信」を現成させるとき、その「信」は「死」という一つの影をもつ。

矢沢は十七歳の誕生日二日前に、次のように自らの内面を綴った。

「生の美しさ、命を持つ美しさ、人間の持つ類なき美しさ。それにぼくがぐんぐんひきつけられ、夢を、希望をえがき、涙の出る程命を賛美するのに、それをぐん！と、おさえつけて一言も物を言わせない厳しさ！ その谷間で、ぼくはとほうにくれるのだ。ぼくにはいくつもの谷間がある。生死の谷間、愛の谷間、神との谷間、人間を信頼すべきものとしても、最後にはぶつかるいいしれない孤独感の谷間。それ等多くの谷間の中で、ぼくは何も知らず、おろおろばかりしているのだ。死のおとずれは、しかし確実に来るのに……。」(矢沢,1970:p.51-52.)

矢沢の内にあった「谷間」が、詩「少年」へと繋がっていると考えると、「少年」に見られる洗練された表現は、日記を書いた十七歳から「少年」を綴った二十歳までの矢沢自身の成長を感じさせてくれる。矢沢の深層的次元から時の時熟として生まれる詩。大橋の「時の与奪」という概念を通して、矢沢の詩の生まれる地平、矢沢の「内省のまなざし」について考えたとき、そこには「信」と「死」の激しい与奪、矢沢の生の美しさに対する喜びと、死と向き合う苦しみとがせめぎ合う内面世界が見えてくる。

4. 2. 3. 「内なる真実」へのまなざし 一時の吞吐

ここまで、大橋の「時の与奪」という概念をたよりに、矢沢の「内省のまなざし」について考えてきた。ここからは、矢沢の内省の世界を、よりゆたかにイメージするために、改めて道元思想を取り上げたい。

大橋は、道元の「有時」の思想と結び付けて、「時の与奪」について説明している。しかし、そこには違和感が残る。大橋の「時」の概念は、道元の「有時」というよりも「3. 1.」でもふれたM.ハイデガー(1889~1976)やニーチェ(1844~1900)といった哲学者の思想に立脚していると思われる。著書『時はいつ美となるか』が中世から近代の西洋建築や絵画を取り上げ、時の美としての時熟について考えたものである以上、それは自然なことだろう。

道元は、「^{もつもつ} ^{あいげ} 物々の相礙せざるは、時時の相礙せざるがごとし。」(禅文化学院,2002:p.28.)という。「有(存在)」は「時」であり、「時」は「有(存在)」であるとする道元。事々物々が邪魔し合わないのは、時が時として邪魔し合わないようなものだと語る。時は邪魔し合わない。それは過去、現在についても同じであり、現在の時が過去へと流れていくのでも、現在の時が過去の時にとって代わるのでもない。すべては「いまの時」(道元は「而今」と表現した)の内にあるとした。では、現在と過去がともに「いまの時」であるのに、互いに邪魔し合わないとはどういうことか。「かの上山渡河の時、この玉殿朱^{ろう}楼の時を吞却せざらんや、吐却せざらんや。」(禅文化学院,2002:p.30-31.)それは「有時」というのは、

過去の時、現在の時を、「吞却」呑みつくし、「吐却」吐きつくしているということ。あらゆる時は邪魔し合うことなく、吞吐している。よって、いかなる「時」も「いまの時」において現成するというのが道元の考えである。そうであるなら、時の内で起きているのは「与奪」ではなく、「吞吐」であるとも言えないだろうか。

矢沢は、生の美しさ、命を持つ美しさ、人間の持つ類なき美しさにひきつけられ、命を賛美する。しかし、同時に、それをおさえつけて一言も物を言わせない厳しさとして「死」を感じている。「4. 2. 2.」で書いたように、それを「時の与奪」という眼で見るとすれば、生命の輝きという光と死の影、それらの「時」は、それぞれに時を与えることで、互いの時を奪い合い、置き換わる。詩「少年」は、その時の臨界点と見て取ることもできるかもしれない。一方、それを「時の吞吐」と見るならば、それぞれの時が、互いを呑みつくし、吐きつくしながら、常に矢沢の「いまの時」の内で大きくなり続けたようにも思える。時は時を吞吐するのであって、あらゆる時は「いまの時」の内にあり続ける。光は死の影を呑みつくし、また吐きつくす。死の影もまた光を呑み、吐く。それらは互いに滅することなく、互いが互いを内に抱きつつあり続ける。砂漠という孤独が魚も水も呑みつくし、内に抱くとともに、矢沢の好きだった空や海を象徴するような「青」が、砂漠という外界を少年の目の内に抱く。互いが互いを抱きながら生起し合う心の世界の中で、少年も一人、死の「影をだいて」いる。そして、そんな内面の世界全体を矢沢自身が抱いている。

詩「少年」は、矢沢の苦悩と希望を、読む人の内に呼び起こすような緊張感を内包しつつ、わずか七行という短く率直な言葉によってゆたかな内面世界を開示してくれている。

次に、「足跡に滲む悲しい記憶」という詩を取り上げる。若干、長い詩ではあるが、矢沢の内面への歩みを辿るかのような象徴性に満ちたものであるため、全文を引用したい。

足跡に滲む悲しい記憶

枯葉が堆積した斜面にね、太古の白夜に発生したひよろ長い茸ばかりが生えているんだ。ここにもある、あそこにもあるとぼかあいながら降りていったんだ。茨が服を引っ搔いてね、ぼかぁ、フラフラしながら降りていったんだ。ぼかぁだんだん重苦しくなってね、その時ふと空が見たいなあと思ったけど、見あげても空がないんだよ。ぐったり俯いて大木の切株を見ていたら、急に花が欲しくなったんだ。ぼかぁ、カサコソと枯葉を鳴らして斜面を降ったんだ。青白い薄っぺらの花がぼくの足に触って揺れていたのね、ぼかぁそおっと茎を噛み切って花をくわえながら降ったんだ。いつか道に出て、その道が石だたみになってね、今度は歩くたびに体も心も軽くなって石だたみの道の向うにポォウと空が霞むようにあったんだ。ぼかぁ花を大事に両手に包んで少し元気に歩いたんだよ。道は交錯してね、東の道に赤い服を着た女の人が見えるんだ。ぼかぁ女の人にも急に逢いたくなって、オーイ、オーイと呼ぶんだけど、女の人はいっこうに振り向かないのだよ。ぼかぁ悲しくなってね、大事にしていた花をポソッと捨てたんだ。すると女の人がね、朝日に輝く

まっ赤な花になったんだ。美しいなあと思ったよ。でもね、ぽかぁそれを折る手が出なかったんだよ。ぽかぁ、それよりもあの斜面の白い、ひよろ長い茸を想い出して、背中が寒くなって怖かったけど、ほんとにぽかぁ気持ちがいいになるんじゃないかと思うほど怖かったんだけど、またあの茸の群の中を夢中になって歩きたかったんだ。(矢沢,2016:p.55-56.)

「ぼく」は、斜面を降りていく。あたかも矢沢の精神、その内深くへと降りていくように。その斜面には、気持ちがいいんじゃないかと思うほどの恐怖を呼び起こす「太古の白夜に発生したひよろ長い茸」が群がり生えている。それは「死」の象徴のようにも思える。歩く石だたみの道は、いつしか別の道と交錯し、そこには女の人が象徴的に現われる。そして、女の人は「朝日に輝くまっ赤な花」になり、「ぼく」は美しさを感じる。一つ一つのものが、象徴性に富んでおり、読む者の想像を掻き立てる作品である。それらの象徴するものをここで限定的に意味付けてしまうことは適切ではないだろう。ただ、この「詩小説」(矢沢の言葉を借りるなら)のような作品は、矢沢の内にあった「谷間」を美しく描き出しているように思える。矢沢の「内省のまなざし」を「時の吞吐」という視点から見ると、矢沢の内にあった「谷間」は、さらに深く混沌とした多義的なものに見えてくる。その思惟的に捉えきれない内面世界と向き合い続けたこと、それ自体が矢沢宰という人間を育てていったのかも知れない。

4. 3. 身をゆだね、入りこみ、満たされること

矢沢には「全てを超越した大きな力」という、森羅万象へと向かうまなざしと、自らの内に「信」なるものを求めるまなざしとがあった。「4. 2. 1.」でみたように、矢沢は共感覚的な原初的層という地平において、まさに全身全霊で自然を見つめていた。また、続く「4. 2. 2.」や「4. 2. 3.」において記したように、自らの内にある「信」なるものを見つめようと、自らの内にある谷間で苦悩と葛藤を繰り返していた。便宜上、内と外の二つに分けたことで、それらのまなざしは一見、内界と外界へと別々の方向性をもっているようにも思える。しかし、自らの外に「大きな力」を見ることは、自らの内にそれを感受する「自己」を見ることであり、同時に自らの内の「信」なるものを見ることは、それを共振させる「大きな力」にふれることだと言えるだろう。それぞれの「まなざし」を、「信」を求める一つの「まなざし」の一側面の表れであると考えれば、矢沢の「信」を求める「まなざし」は、両義的なものとして、私たちの前に改めて立ち現れてくる。

ベットの上で身動き一つ取れない絶対安静が長く続いた中、手鏡に空を映し見つめていたほど、矢沢は空が好きだった。

空をはじめ、風、雲、雪、ききょう、こぶし、リンドウ、春、秋、矢沢は多くの自然、生命に心をひきつけられていた。メルロ＝ポンティの以下の言葉は、そんな矢沢の「まなざし」を感じとる手がかりになるのではないだろうか。

「天空の青をながめる私は、無世界的主体としてそれに向き合っているのではない。私はそれを思惟のなかで所有するのではない。私はそれをまえにして、その秘密を私にあかしてくれるような青の観念をくり広げるのではない。私はそれに身をゆだねる。私はこの神秘的ななかへ入りこむ。それが「私のなかで己れを思索する*」のだ。私は、集中し静思しそして対自的に存在しはじめる空そのものである。私の意識はこの無限の青によって満たされる。」(メルロ＝ポンティ, 訳, 1974:p.19-20.)

世界とかかわりを切って空と向き合うのでも、思考によって空を理解するのも、自分の中で空を意味付けるのでもなく、矢沢は、空に身をゆだねる。矢沢はそれら「大きな力」、神秘的の内に入りこむ。それ自体が自らを見つめることである。矢沢の「まなざし」は、そのような森羅万象との出会いの地平に立っている。空を対象として外側から捉えるのではない。また、自己を外側から分析するのでもない。私たちは、本来、そのように「身をゆだね、入りこみ、満たされる」という仕方に出合っているのだが、科学的、進歩的、様々な反省的・抽象的次元のもの見方が、そのような出会いの実感を覆い隠してしまっているのではないだろうか。矢沢幸の詩は率直かつ短い言葉で、（それを読む私たちの内にある）その地平の感覚を呼び覚ましてくれるようにも感じる。それもまた、矢沢幸の詩のもつ魅力、美しさの一つなのだろう。

矢沢の「まなざし」と「身をゆだね、入りこみ、満たされる」出会いの地平がよく表れている日記がある。十九歳の十一月、あこがれていた柏崎の海へ行ったときのものである。

十一月四日(月) 雲

柏崎へ行く許可を得た。海に会える！ 潮の響き、塩っぱい風、それらが私を迎えてくれるだろう。私の胸の一たんに常に海があった。海は私の空白をなぐさめてくれた。その色は私を落ちつかせ、想像は心を大きくした。何を感じ、何を与えてくれるだろうか。希望か絶望か。ああ心が鳴る。スケッチしてこよう。彼女のために。喜びの出会いにした方がいい。海をしっかりと見つめてこよう。海、海！海！

十一月五日(火)

海があった。かぶさるように広がっていた。さびしい光にゆれていた。

十一月六日(水) 晴

波におっかけられたり、貝をひろったりして歩いた。腰をかかめるたびに潮の香が鼻をついた。ガラスの切り身のような色の水が、岩の上にあった。波がかぶさって引く時は、白泡がその緑の中に舞って緑の泡となる。ほんとうにはてしない西の方は、刻々と色が変わる。佐渡も雲か島かげか見分けがつかないほど、うっすらと彼方にあった。私と江川は岩のとび出た上に登って話した。話の合間の沈黙に、海は私の心に広がって、海が私自身であるような気がする。(矢沢,1970:p.91-92.)

長く闘病生活を送っていた矢沢にとって「海との出会い」は、気持ちを高ぶらせるものであったのだろう。約一年三か月前、十七歳の八月には、絶対安静時を振り返り、「海で死ぬこと」、そのために「柏崎へいく方法」を考えていたと記している。そしてその二年後、十九歳で「何を感じ、何を与えてくれるだろうか。」と、矢沢のまなざしは海へと向かうと同時に、期待とともに自らの内で共振するものへと向かっている。また、「話の合間の沈黙に、海は私の心に広がって、海が私自身であるような気がする。」という言葉に、矢沢の感覚が素直に表現されていると思える。かぶさるように広がり、さびしい光にゆれる海は、矢沢に何を与えたのだろうか。それを読み取ることはできない。しかし、一時期には「死」のための場所と考えていた「柏崎の海」が、十九歳の矢沢にとっては「信」を映す「私自身」へと変化している。矢沢の「信」へのまなざしと希求は、そのような精神的な変化を生み支えたのではないだろうか。

本章では、「まなざし」という視点から、矢沢幸の内面世界について想いを巡らせてきた。そこには、自己を含めた森羅万象の内に自らの「信」なるものを見出そうと、自然の「緩やかな時」の内で葛藤を続けた矢沢の姿があった。自らにとって「信」なるものを希求し続けること、それ自体が矢沢を「身をゆだね、入りこみ、満たされる」という次元へと誘い、その内で矢沢は育まれていったのではないだろうか。では、矢沢はそこで何を見出していったのか。次章では、希求し続けた「信」それ自体に焦点をあてる。

5. 美しさと愛 ー愛を私は求め続けてきたー

5. 1. 矢沢幸の求めた「美しさ」

担当医である吉住先生との対話が始まり、それについての自問自答が日記に綴られたのは、一九六〇年末から一九六一年、矢沢が十六歳の後半から十七歳になる頃だった。その後、十八歳の三月に退院をしたものの、四月には排尿後の違和感から再発の予感に苦悩する。

その頃から、日記には「美しさ」という言葉が、それまで以上に象徴的に綴られるようになる。例えば、十九歳になる一か月前の四月二十三日の日記。

「…私に光る時間を続けさせてくれ！ お願い！（中略）私を助けてくれ。美しく生きるために。美しさが欲しいために。美しさを探すために。これは利己的だ。だが、その私から得るものがあったら遠慮なく取ってくれ。私は生きたい。」（矢沢,1970:p.79.）

矢沢の求めた「信」の一つとして「美しさ」があると考えられる。発病から、死との対話、そして「信」なるものの希求の中で、一つの光として矢沢の内に生じた「美しさ」への想い。あるいは、矢沢自身が求めた言葉にならない「信」が、「美しさ」という言葉で表現されるに至ったといえるのかもしれない。「美」という言葉には、多様性があり、その概念も古代から近代まで様々である。ここでは矢沢幸が「美しい」と表現したものを、その言葉にそのまま寄り添いながら、矢沢の求めた「美しさ」について想いを巡らせていきたい。

「美しさ」を感受すること、「美しさ」を感じながら生きること、それは矢沢にとって倫理的に生きることそのものであり、生の真実であり、自らの生を支えるもの、希望であったように思える。詩「美しいもの」では、自然の美しさとともに、「死」を迎える者の死に行く在り方にも「美しさ」を感じている。

美しいもの

私はこの頃よく美しいものを見る。秋のために美しいものが多くあるのか、私の心が開いているためだろうか。例えば、昼さがり散歩していてリンドウの花を見つけた。コップにさそうと思って手折ってみると、ガが花の中に身をひそませて死んでいた。はじめはガだとわからなかったのだけど、他の花と見比べてみて、はじめてガだと気がついた。どうしてこんな中にはいつて死んでしまったのだろう。彼女のそのわけを知りたいと思った。しかし、いずれにしてもこんな秋の日の中の、しかもリンドウの花の中で死んで行けるものは、幸せだ。私はその花をそうっと枯草の中にうずめてきた。（矢沢,2016:p.53-54.）

「4. 2. 1.」でみたように、矢沢にとって秋の色は「むらさき」である。その内で咲くリンドウ。孤独の内にも、どこか優しさと癒しをもたらす秋の日。その美しさが、ガの身を包み、死を吊っているかのようである。そんなガを抱く花を、「私」はそうっと枯草の中にうずめる。それもまた、「私」による吊いだろう。詩「美しいもの」では、自然の内の美しさが表現されるとともに、どこか、死を迎えるガの生命と矢沢自身が重なる。

「生^{しょう}より死にうつるところうは、これあやまりなり。(中略) 生といふときには、生よりほかにものなく、滅といふときは、滅のほかにもなし。」(禅文化学院,2002:p.23-24.)

道元は、生は生であり、死は死であるとし、生が死へと移り変わるという考えを否定した上で、生や死を我が物にしようなどと言ってはならないし、願ってもならないとしている。道元の思想から考えるとすれば、死を生を終焉、移り変わりとして対峙させるということは、「死」の観念を内に抱き、生の有限性に苦悩することではないだろうか。誰しもそうであるように、矢沢自身も常にその苦悩と葛藤の内にあったことは日記を読めば分かる。ただし、詩「美しいもの」においては、「自然や人間の力を越えたもの」へのまなざしと、そこで感受された「美しさ」によって、生の有限性、それ自体が優しく包まれ、肯定されているかのようである。「自然や人間の力を越えたもの」による「美しさ」は、「生と死を対象とした思索」を保留させる。言い換えるなら、「死」の観念や生の有限性よりも、生そのもの、死そのものの次元を開くということ。「生といふときには、生よりほかにものなく、滅といふときは、滅のほかにもなし。」という次元。それは決して、死を考えないようにすることや、今のことだけを考えるということではない。または一種の諦めでもない。その「美しさ」は「生死を越える生命の神秘」そのものの体験へと私たちに誘うのではないだろうか。それにふれることは、永遠の「時」にふれることや、「緩やかな時」の内に身を委ねることともつながっているのだろう。

矢沢の「信」を求めまなざしの先には、そんな生の有限性を肯定し包み込むような、生死の観念を越えるような「美しさ」があったのではないだろうか。

あるいは、「自然や人間の力を越えたもの」のもつ未知の「美しさ」は、死を生を終焉とみる地平を離れ、生という未知、死という未知、それ自体にふれる体験をもたらすのかもしれない。

希望

とろんとした暖かさの中に
時々響くバイクの音や
煙突よりも
向うの空で
はちきれそうに
鳴く雲雀。
頭を出したばかりの
名も知らぬ草々に
薄くほほえむ太陽。
こんな時僕は
なんとはなしに
あくびをする。

大きな大きな

あくびをする。(矢沢,2016:p.67-68.)

この世界そのものの、何気ない日常の美しさの内であくびをする。詩「希望」には、生死を越える生命の神秘、そのような「美しさ」の体験は綴られていない。しかし、何気ない日常、目の前の世界、生命の美しさの内に抱かれ、生そのものに迷いなくひたるかのような「生よりほかにものなく」の位相が感じられる。そんな詩に「希望」という題名が付けられていることも感慨深い。矢沢の詩の中において、世界はいつも大きく、力強く、優しく、温かく、そして美しい。

5. 2. 矢沢幸の求めた「愛」

「2.」でふれたように、矢沢は最後の日記に次のように記した。「そして、人の心の中に、女の愛の中に求めてきた。力ぞえを、はげしさを、すくいを！ 愛を私は求め続けてきた。」(矢沢,1970:p.103.) 十九歳以降、矢沢の求めた「美しさ」には、女性への「愛」という側面が色濃く表れてくる。矢沢は自らの内に愛する女性を想う心を見る。それは、生を生として有限なまま肯定するかのような世界の美しさ、そんな人間の力を越えたものの気配を自らの内に感じることであったのではないだろうか。そして、それは矢沢にとって希望の一筋の光だったのかもしれない。以下は、「美しさ」と「愛」の結びつきを感じさせる、十九歳、六月一日の日記である。

六月一日(土)

半月と星の夜だ。私は星の光に真を見た。過去の私と、未来の私と、現在の私が、いつわり者であったとしても、この純な心のあることを認める。会いたい。ただ、それだけの心だ。胸をかきむしるほど。これだけは純粋なものだ。私はこれが愛の一面だと思う。いや愛のすべてだと思う。私は小さな美しさを作ることもできない。こんなに美にあこがれていても！ 私は美しさを持っていない。こんなに望んでいるのに！ しかし、私は今夜発見した。こんなに美しい心を！ 自分の中に！ 私は、この心を離すまい。私は育ててみようと思う。とにかく会いたい。ひどく会いたい。醜いものであってはならない。夢のあるもの、美しいものでなくてはならない。私は求める。熱望する……。

(矢沢,1970:p.84-85.)

この時に綴られた「愛」が、「2.」で取り上げた最後の日記の中で記される「愛」とつながっている。そしてそれは、すでに見たように、矢沢が望んだような形で実を結ぶことはなかった。「美」と同様に「愛」という言葉の意味は多様であり、歴史、宗教、思想によって捉えが異なる。ここでは、矢沢の綴った「愛」という言葉をたよりに、矢沢が、その短い生涯の晩年に育もうと熱望した女性への「愛」を見つめ、矢沢の内面とその変化について考えていきたい。

まず、矢沢にとって最も身近で、大切であった女性として母親がいる。矢沢の詩や日記の中でも、母親についての言葉は少なくない。その中でも特に、詩「帰って見たい」は女性への愛の根底を成すかのような印象的な作品である。

帰って見たい

もう一度、もう一度、あの場所に帰りたい、あの場所に。
 泣いたことも、眠ったこともある、ぬくみのあるやわらかい所、
 それは、だれにとっても帰りたい、この世で、一番良い
 みんな通ってきたことのある、いこいの場所。母の、母のひざの上。
 僕は今も思うのである。大人はそんなこと考えていないようだが、
 本当は思っているのだ。
 ひざの上に乗り乳房をふくむ姿を、思いうかべる。
 もう一度、行きたい、母にあの上であまえない。
 これを考えている時、どんな気持ちがするか、
 むねがさわぐのをおぼえ、自然にニタニタとわらう。
 しかしもうそんな事は出来ないのだ。
 はずかしい、しかし、一人で考えている、みんなが口には出さずに。
 もうこんな望みは出来ないが、ひざの上に帰りたい。眠って見たい。
 泣いて見たい。お話したい。(矢沢,2016:p.84-85.)

河合隼雄の『ユング心理学入門』(河合,2009:p.227-229)によれば、スイスの精神科医で心理学者のC.G.ユング(1875~1961)は、男性の「こころ」の像は、女性像として現われることが多いとし、それらの像の元型(時代や地域を超えて、類似する像や象徴を表出する心の構造)を「アニマ(anima)」とした。(その内界にある女性像は、外界の特に女性に投影されることが多いといわれる)その上で、アニマには生物学的な段階、ロマンチックな段階、靈的な段階、叡智の段階の四つの段階があるとした。そして、そのアニマの登場の前段階として、「母親の像」と「母親代理の心像」が現われるという。

ユングの考えに立脚して見るならば、詩「帰って見たい」は、母なる愛、その内に抱かれることを求めた「母親の像」の現われのように思われる。あわせて、日記からは「母親代理の心像」の現われも読み取れる。例えば、十六歳の五月の日記「あの看護婦さんが、窓から外をながめている、その横顔をぼくは見るのが好きだ。そうやっていつまでもいられたら、ぼくは「この外に何もいらぬ」というかもしれない。」(矢沢,1970:p.51.)それは「母親の像」からアニマ像への移行の段階であり、母親からの独立への準備でもある。矢沢は「大人はそんなこと考えていないようだが、本当は思っているのだ。」と、(ユングの元型や集合的無意識の領域にもつながるような)心の奥に想いを巡らせている。矢沢にとって、母への想いはそれほど自然かつ強いものであったのだろう。

その後も矢沢は、日記の中で女性を想う気持ちを綴っている。また、二十一歳には、これまで日記には書いてこなかった「命と恋の悩み」の存在について吐露している。以下、関係する日記をいくつか引用する。

十七歳

六月二十二日

「あの看護婦さんが今、葉を持ってきた。月をのぞかしてやった。髪のおいがした。夜のおいだ。あの人の髪はすばらしい。パーマントは、やらないのらしい。黒い所に、リンドウの花が小さく入っているのだ。あの人らしい。あの髪をただで、深い優しさがぼくの胸をついてくる。(中略)／あの髪に顔を埋めたら……やめよう。やめよう。やめよう。何だかすべてのものに、愛情が持てる気

がする。紙切れにも。ペンにも。ぼくは幸福かな？さびしく、こまってはいるが、それでも、何か、すべてのものを愛してやりたい。きらってはいない。ああもうやめよう。」(矢沢,1970:p.58.)

六月三十日

「看護婦さんとぼく、そこには何の変りもないのだ。ただぼくが一方的に好きだということ以外に、それがまた絶望だ！…」(矢沢,1970:p.59.)

九月十日

「雨の音がしている。ぼくが海で死にたいといたら、きょう看護婦さんは、山がいいと。海がいい。」(矢沢,1970:p.63-64.)

十九歳

五月八日

「幸せなんていない。しかし、この黒いマントをはらいのけたい。四年前と同じような心で親身になって相談できる話し相手が欲しい。恋人がいたら……………」(矢沢,1970:p.84.)

六月一日には、はじめに引用した「愛」の自覚と「美しさ」の発見についての日記を書いている。

六月二十一日

「私は彼女の目をのぞきこんだとき「ああ、これが恋なんだな」と感じた。私は、そのとき、これが純粋であることも知った。そしてこれからもそれを失わないことを誓う。そして、そのためには私自身を確かなものにしないといけない。つまり、恋におぼれてはいけない。私は真剣な気持だ。」(矢沢,1970:p.86.)

十月十六日

「あなたの夢を見た。」(矢沢,1970:p.90.)

二十一歳

六月二十三日

「私は恋をしている！ しかも真剣な！ 真実な！ のっぴきならぬ気持で！ 日記しなかったが、私は命と恋について、どれほど悩んだことだろう。毎日、心と話していた。これで体も心までも危機を招いた。しかし、私はこの頃そのためにむしろ勇気を得た。まるっきり、絶望が襲ってこないわけがない。しかし、あの自殺の観念は押えることはできた。押える自信がある。私は恋をしている。私は求めている。人生を、死ぬ前に私はその一端なりとも知りたい。結局私は不満なのだ。あきらめ切れないのだ。人生の可能性を。真実を。私は夢見ているのだ！」(矢沢,1970:p.100.)

ユングは、アニマと向き合うのは三十五～四十歳以降だとし、人生の後半に至るための転換期として重要だと主張している。しかし、河合は『ユング心理学入門』の中で、例外と前置きをした上で「芸術家、宗教家や、前述したように心理療法家なども、若いときからアニマの問題と取り組まねばなら

ぬ宿命を背負った特殊なひとであると思われる。」(河合,2009:p.235.)と説明を加える。「信」を探し求め、詩を綴り、葛藤し続けた矢沢もまた、(矢沢の女性への愛がアニマの問題であるとは確言できないが)あまりに早く、そしてあまりに深く、自己の内面と向き合わざるを得なかったのではないか。ある意味において、矢沢には人生の前半と人生の後半とが同時に訪れていたとも言えないだろうか。

矢沢の向き合った愛は、日記に記されているとおり、向き合うこと自体が、心身の危機を招くほどの苦しみを生むものだった。ただ一方で、その苦悩の内に見た「愛」と「美しさ」は、矢沢に勇気を与える、一筋の希望の光でもあったことは確かだろう。

フランスの哲学者であるガブリエル・マルセル(1889~1973)は、「希望の現象学と形而上学にかんする草案」の中で、次のように語る。

「…ほかならぬこの愛の存在するところにおいて、またこの愛が存在するところにおいてのみ、ひとは希望について語る事ができるし、また語らなければならないのである。」

(マルセル,訳,1968:p.74.)

マルセルによれば、希望は、他者への愛をとおした自己の復帰、再生成でありながら上昇、変容(自在性)でもあるという。矢沢にとって(自らの内に見た美しさでもある)愛を見つめるということは、生への応答、魂の自在性への求め、希望の内を生きることであったのではないだろうか。

ナチスの強制収容所での体験が綴られた『夜と霧』の中に、著者であるヴィクトール・E・フランクルが愛について語る部分がある。愛が魂の自在性という希望へとつながることを表すかのような体験談である。

朝早く、暗い中を収容所から「工事現場」へと向かうフランクル。隣りを歩いていた仲間が女房のことについてつぶやく。そのときフランクルは「妻の姿をまざまざと見た!」という。フランクルの心は妻の面影に占められていた。妻がここにしようがいまいが、その微笑みは、たった今昇ってきた太陽よりも明るいと感じ、「愛により、愛のなかへと救われること!」(フランクル,訳,2002:p.61.)を理解したという。別の収容所にいた妻はすでに亡くなっていたが、フランクルにはそのことを知るすべがなかったし、そのときはなぜか、そのことは問題ではなかったとしている。それは「…わたしの愛の、愛する妻への思いの、愛する妻の姿を心のなかに見つめることの妨げにはならなかった。」(フランクル,訳,2002:p.63.)その瞬間にフランクルは真実を知ったとし、旧約聖書を引用して、その語りを締めくくっている。

「[われを^{なんぢ}の心におきて^{おしで}印のごとくせよ……^そ其は愛は強くして死のごとくなればなり」(「雅歌」第八章第六節)](フランクル,訳,2002:p.63.)

かけがえのない他者を愛することで、世界は希望に満ち、美しいものになる。

5. 3. 森羅万象という「他者」

これまで、矢沢の詩と日記から「3. 永遠の「時」、4. 「信」の希求、5. 美しさと愛」について、矢沢宰という一人の人間の「人間形成の軌跡」に想いを巡らせてきた。

自身の「時」の内、自然の「緩やかな時」の内、感受性ゆたかに「詩」と語り合った矢沢。信じるものを希求するまなざしは「人間の力を越えるもの」へと向かうと同時に、自らの内面深くへと向けられた。二十一年という生涯の晩年、矢沢の見つめた「信」は、「美しさ」そして「愛」として、矢沢の希望の光となっていった。

矢沢幸の「人間形成の軌跡」に想いを馳せるとき、そこにはいつも「他者」が現われる。矢沢にとっての「他者」は人間にとどまらない。矢沢は、一人の女性も、一輪の花も、空も、秋も、心から愛した。日記と詩を書き始めた十四歳のときから、すでに矢沢は森羅万象という「他者」へと語りかけていた。「おまえは／本当に健康そうだね／つばみは／ちょっとさわれば／はじけそうだね」（矢沢,2016:p.12.）詩「ききょう」では、ききょうという「他者」を愛おしく想う気持ちが柔らかな語りかけの中につままっている。「雪は／天国の／あまりにも／幸福すぎるのに／退屈して／世の中へ／フワフワと／消えに降りてくるのだとさ／フワフワと／フワフワと／雪はバカだなあ」（矢沢,2016:p.42-43.）詩「幸せ」では「バカだなあ」という否定的な言葉にも雪への温かな気持ちがこもる。

以下の詩「空が好きだ！」は、空が好きだった矢沢らしい詩である。まるで、友達に語りかけるような爽快な言葉、矢沢がどれほど空に支えられながら日々を過ごしたかが伝わる。

空が好きだ！

俺は空が好きだ。

青いお前が

曇っていても晴れることを信じ

いつまでもお前が好きだ。

空よ！

お前と神が俺のことをしているわけだ。

だから俺は、神とともにお前を尊敬し愛す。

たしかにお前は俺を力づけ慰め

あらゆる点で俺には利になった

俺のためでなくても、俺には

そう思える。

感謝の気持ちとお前の力を考えると、

何だか楽しくなってきた、

牛乳ピンをガリガリかじる。

とってお前が好きだからだ（矢沢,2016:p.85-86.）

矢沢は、空という「他者」と何度も対話を重ね生きた。空の力をゆたかに感受し、空への愛、空への感謝の念を抱いていた矢沢。詩「空が好きだ！」からは矢沢のゆたかな感受性と純粹さが感じられる。矢沢の感受性と純粹さは、幼い頃からの日々の中で形づくられてきたものであると思われるが、これまで見てきたように、死を目の前にした矢沢幸の「人間形成の軌跡」によって、それらは一層研ぎ澄まされていったようにも思える。そして、その感受性と純粹さは、矢沢のあらゆる「他者」とのゆたかな対話の支えとなったのではないかと考える。

次の詩「本当に」にも、「他者」を迎え入れる矢沢の感受性、純粹さがよく表れている。

本当に

本当になって
 話をきいてくれると
 そのうれしさに
 目のまわりがあつくなる
 でもその人に
 はずかしいから
 ぐっところえると
 ひざが
 ガクガクしてきて
 体がふっと浮きそうだ (矢沢,2016:p.21.)

矢沢の前に絶えず到来し続けた「他者」は人間に限らない。森羅万象という無限に生起し続ける「他者」と、生涯をとおして、全身全霊で対話を重ねた。そこに矢沢宰の言葉の美しさがあり、矢沢自身の「人間形成」の特筆すべき点があると考ええる。

6. おわりにかえて

死を目の前に生きた矢沢の「足跡」を辿り、その日々を見つめると、そこに現れてくる人間形成のゆたかさに心うたれる。矢沢宰の日々は、まさにそのものが、かけがえのない人間形成の「時」であったといえるだろう。「生きること」そのものが目的だという地平に立った矢沢の言葉は、生そのものの内で、死をも含めた生そのものを見つめ「生きること」、そのゆたかさを、現代の私たちに開示し続けている。『足跡』のあとがきにおいて、周郷博は(自身の恩師である)内藤濯による以下のような言葉を紹介している。

「矢沢君を天才と言ってしまったのでは何も説明していないネ……私は、矢沢君は、自分の中に`学校、をもっていた、生まれたときから自分もっていたその`学校、で教育されたんだ、とでも思うほかないヨ……」(矢沢,1970:p.110.)

「矢沢君は、自分の中に`学校、をもっていた」その表現は示唆に富んでいる。あらゆる生の内で生じる人間形成、臨床という地平から人間形成をみるならば、私たちは、それぞれ自らの内に`学校、をもっていると言えるのかもしれない。他者や世界との交わりに、私たちは生まれ、同時にその内で私たち自身を育む。矢沢の日記や詩は、そのことを伝えてくれているように思える。それは無意識の内で生じ続けることかもしれない。ただ、矢沢自身はある程度、そのことに自覚的であったと思われる。十六歳、四月の日記と、詩「私の中で」からは、「自らが自らを育む」という感覚が伝わってくる。

「ぼくという、赤ン坊ではない人間の改造。どうしてもやる必要があるような気がする。現実を土台にして、神という方向でもなく、敗北を前提にしたものでもなく、0点から自分の力で新たに作り変える。／よし！ やろう！ 明日からといわず、今からでも 早くやろう！」(矢沢,1970:p.48.)

私の中で

私の中で他人^{ひと}の花は咲かない
 他人^{ひと}の中で私の花は咲かない
 私には私の中で私の花が咲く
 枯れて行く花が……
 そよ風にも散りそうな
 弱い花
 それでもいっしょうけんめいに開こうと
 努力する強い花
 そういう花を私はかざりたい (矢沢,2016:p.112-113.)

私たちは、矢沢幸の足跡を辿ることを通して、私たちを含む世界、森羅万象、人間の力を越えるものを感じ、他者を愛し、希望の内に生きるという、一人の人間の「生きること」の地平をみた。それは、決して一般化されることのない、矢沢幸の固有で、多義的な、身体性をともなう唯一の「人間形成の軌跡」でありながらも、「生と死」という誰もが出合い、問うであろう普遍的な地平を照らす光をもつ。だからこそ、矢沢幸の日記と詩は、それを読む私たちの心をうつのだろう。矢沢の「人間形成の軌跡」は、私たちの前に「教育としての人間形成」が及ばない地平を開いている。それは、同時に「教育としての人間形成」のさらなる可能性でもある。矢沢幸の生涯は、これまでとは異なる地平から人間形成について問う視点と、その重要性を示してくれているのではないだろうか。

一九六六年三月十一日、矢沢幸は劇症肝炎を発症し、永眠した。絶筆として七行の詩が残っている。「小道がみえる」を引用し、矢沢幸の足跡を辿る歩みを終わりたい。

小道がみえる

小道がみえる
 白い橋もみえる
 みんな
 思い出の風景だ
 然しわたしが居ない
 わたしは何処へ行ったのだ？
 そしてわたしの愛は？

(絶筆)

(矢沢,2016:p.61.)

注

1. 一昨年、私たちは、矢沢幸の作品を教材として、小学校6年生の教室で授業実践を行っている。また、青柳は約14年前に、やはり6年生において矢沢の詩についての授業をこころみている。

それらの記録として（青柳,2008a;青柳,2008b;大関・青柳,2020b）を、参照いただきたい。加えて、ここ数年、私たちは「命」や「生と死の教育」について問い直し授業実践を重ねてきた。その記録として、（青柳,2018;大関・青柳,2019a;大関・青柳,2020a;大関・青柳,2021b）も参照いただければ幸いである。

2. 昨年、私たちは立松和平の作品を「いのち」の思想という視点から読み取る教材研究をこころみた。その思索の拠り所として、道元禅師の思想を多く取り上げている。（大関・青柳,2021a）を是非、参照いただきたい。
3. 「人間の力を越えたもの」については、約3年前にジャン＝リュック・マリオンの「与え（贈与）」の哲学に学び、小学校6年生と世界からの「与え（贈与）」について語り合う授業実践を行っている。（大関・青柳,2019b）を参照いただければ幸いである。

また、『沈黙の春(Silent Spring)』を書いた海洋生物学者のレイチェル・カーソンは、著書『センス・オブ・ワンダー』の中で、「人間を越えた存在を認識し、おそれ、驚嘆する感性」を育むことは、生きていることへの新たなよろこびへと通ずる小道を見つけだすことに繋がるとした上で、それによって、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力をたもちつづけることができると書いた。「人間の力を越えたもの」への感性については、宗教や哲学という視点からだけでなく、科学者であるレイチェル・カーソンの眼からも、私たちの生にとってその重要性が指摘されている。

参考文献

- 青柳宏(2008a). 詩を読む実践について:「矢沢幸詩集」の授業(その一). (『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第31号)
- 青柳宏(2008b). 詩を読む実践について:「矢沢幸詩集」の授業(その二). (『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第31号)
- 青柳宏(2018). 「生と死の教育」を問いなおす:宮沢賢治とエマニュエル・レヴィナスの視界から. (『宇都宮大学教育学部研究紀要』第68号 第1部)
- カーソン, R(1996). (上遠恵子訳)センス・オブ・ワンダー. 新潮社[原著初版は1965年]
- フランク, A(2003). (深町眞理子訳)アンネの日記(増補新訂版). 文春文庫[原著初版は1947年]
- フランク, V.E(2002). (池田香代子訳)夜と霧. みすず書房[原著初版は1946年]
- 河合隼雄(2009). ユング心理学入門(〈心理療法〉コレクションI). 岩波現代文庫[原著初版は1967年]
- 岸本英夫(1973). 死を見つめる心 ガンとたたかった十年間. 講談社文庫
- レヴィナス, E.(2005). (熊野純彦訳)全体性と無限(上). 岩波文庫[原著初版は1961年]
- レヴィナス, E.(2006). (熊野純彦訳)全体性と無限(下). 岩波文庫[原著初版は1961年]
- マルセル, G.(1968). (山崎庸一郎・白井健三郎・伊藤晃・訳)マルセル著作集4 旅する人間. 春秋社[原著初版は1944年]
- メルロ＝ポンティ, M.(1974). (竹内芳郎・木田元・宮本忠雄・訳)知覚の現象学2. みすず書房[原著初版は1945年]
- 三木清(2011). 人生論ノート(改版). 新潮文庫

- 中村雄二郎(1992). 臨床の知とは何か. 岩波新書
- 大橋良介(1984). 時はいつ美となるか. 中公新書
- 大関健一・青柳宏(2019a). 「命」をめぐる授業: 宮沢賢治との対話を通して. (『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第6号)
- 大関健一・青柳宏(2019b). 「与え」をめぐる授業: 贈与の哲学と間主観的アプローチを基に. (『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第6号)
- 大関健一・青柳宏(2020a). 「他者の死」と共に生きる「生と死の教育」: 宮沢賢治の「春と修羅」「銀河鉄道の夜」をめぐる. (『宇都宮大学教育学部研究紀要』第70号)
- 大関健一・青柳宏(2020b). 他者の生命にふれる「生と死の教育」: 矢沢幸との対話を通して. (『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』第7号)
- 大関健一・青柳宏(2021a). 立松和平の「いのち」の思想: 「いのち」をめぐる教材研究のこころみ. (『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第71号)
- 大関健一・青柳宏(2021b). 宮沢賢治の「永訣の朝」をめぐる授業: 賢治とトシとの対話を通して. (『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』第8号)
- 矢沢幸(1970). 足跡: 矢沢幸《光る砂漠》日記編. 童心社
- 矢沢幸(1991). 矢沢幸詩抄. 見附市文芸協会 矢沢幸記念事業実行委員会
- 矢沢幸(2016). 矢沢幸詩集一光る砂漠. 思潮社
- 頼住光子(2014). 正法眼蔵入門. 角川ソフィア文庫
- 禅文化学院(2002). 現代訳 正法眼蔵 新装版. 誠信書房

令和3年10月1日受理

Human formation from the perspective of
clinical horizon:
Following the trace of Yazawa Osamu as a
young poet

OZEKI Kenichi, AOYAGI Hiroshi